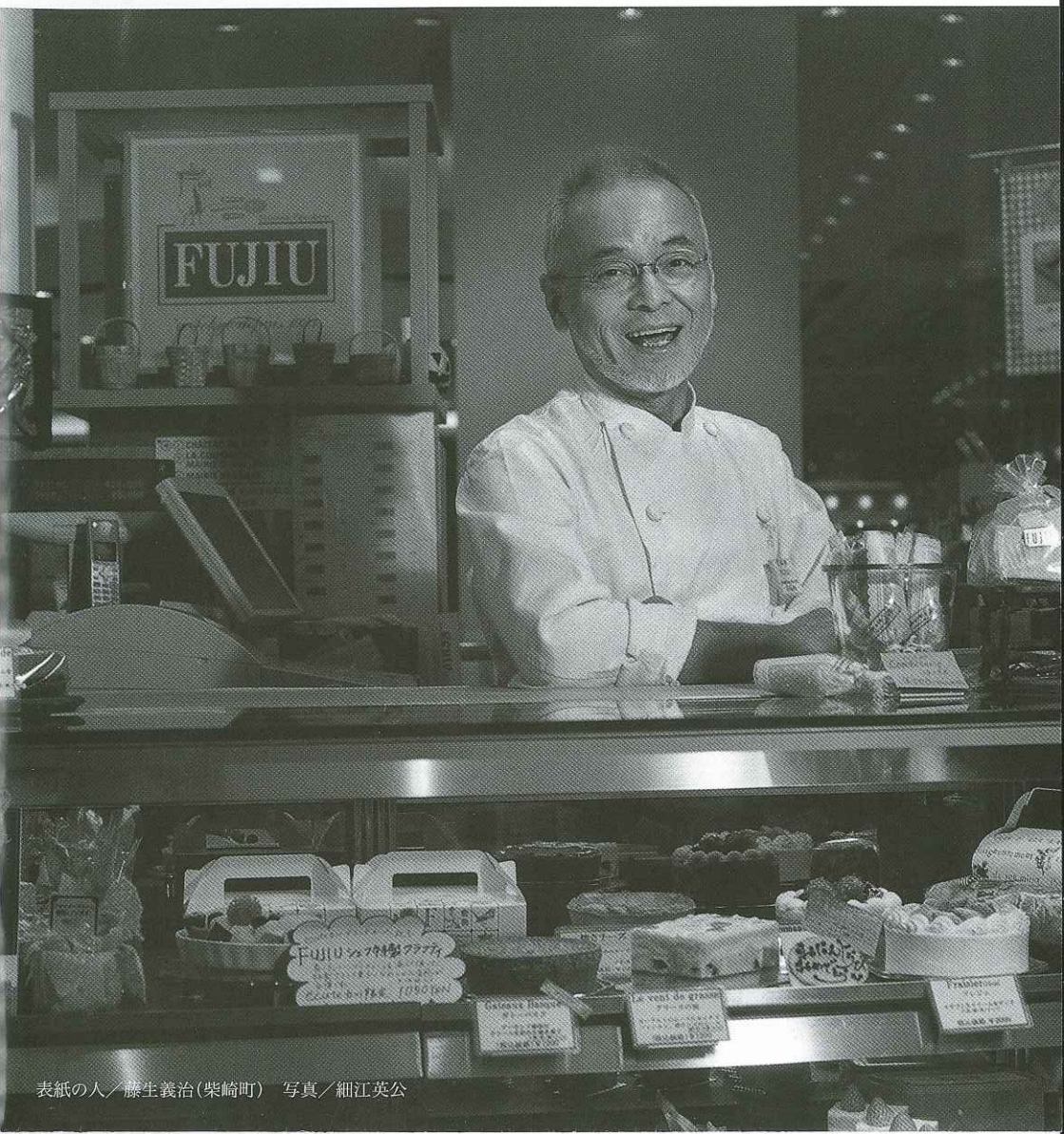
えくてびあん

応援します！《極地研》

【新連載】国立極地研究所
第51次南極地域観測隊始動

9

立川と語ろう　立川に生きよう
September 2009
écoutez bien Vol.28 No.298

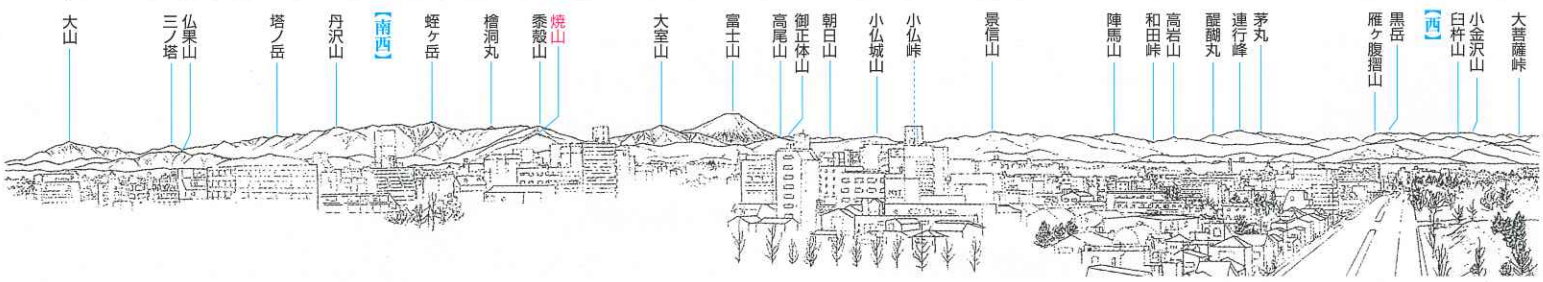


表紙の人／藤生義治（柴崎町）　写真／細江英公

続々・立川から見える山 ②

焼山（やけやま） 1,060m

案内人：守屋龍男
山岳展望図：藤本一美

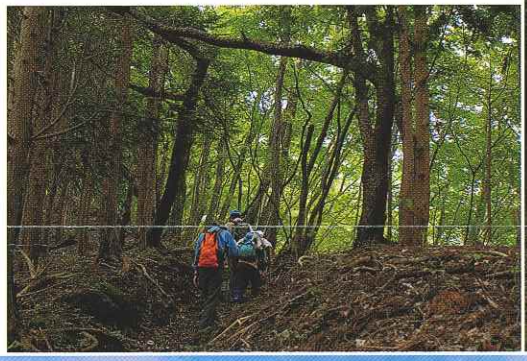


多摩モノレール 立川北–高松間より

東海自然歩道随一の難所

［焼山へのコース］

車で西野々まで相模湖経由で約 1 時間 30 分。
電車・バスでは橋本駅経由で約 2 時間。
西野々→ 1 時間→尾根道→ 1 時間 30 分→分岐→
15 分→山頂（往路戻る）



丹沢山塊の北端に位置する山で、高尾山起点の東海自然歩道が通っている。山名は鷹狩りをしやすくするため毎年山焼きをしたことに由来するという。昭和 25 年頃、NHK のラジオで放送された青木茂作「三太物語」で、三太や花子、花荻先生らが活躍した場所が、この焼山の山麓や道志川一帯である。

まだ、夏の蒸し暑さが残る 9 月中旬に登った。登山口は山梨県境の相模原市西野々。ヒルに注意の看板があり、少し緊張して入山した。登山道には何箇所か倒木があり、それをまたいで通過し、一旦谷に降りて隣の尾根に付けられた道に入る。

尾根の中ほどからは厳しい崩壊地が続き、一歩一歩慎重に足を進めた。ここは全長 1700km もある東海自然歩道の中でももっとも険しいところだ。その先でようやく尾根も緩やかになり、快適に登る。草花を見る余裕もできたのか、ヤマトリカブトやカシワバハグマが実に綺麗だ。前方に空が見えてくる頃、巻道と直登道の分岐があり、直登の道を選ぶ。シラカバが十数本立ち並んだ中を登ると、程なく山頂に着いた。

山頂は広々とした草地で木製のベンチ・テーブルが設置してある。3 つの石の祠がそれぞれ 10 メートルほど離れて大きな三角形の位置に立ててある。山麓の青根、青野原、鳥屋の各集落を向いている。三角点の近くには鉄骨で組まれた高さ 10 メートル程の展望台がある。登ってみたがぐらぐら揺れていささか怖かった。展望はなかなか良くて、津久井方面がパノラマのように広がって見えた。帰りは元の道を下り、西野々に戻った。

念のために足回りを確認したら、全員にヒルが数匹まとわりついていた。地元の自治会が用意した瓶に投げ入れ退治した。

トルコと日本 友好の担い手に

立川と語ろう

アイシェヌール・テキメンさん

博報招聘研究員として、国立国語研究所に通っているトルコ人女性。
生きた日本語を巧みに使い、国を理解し言葉を理解するためにはどんな努力も惜しまない。
自分に妥協を許さず、いつも真正面からものごとに取り組む姿勢。
何度会っても、教えられることばかりだ。

アイシェヌール・テキメンさん。アンカラ大学 日本語日本文学科学科長だ。1年前に招聘研究員として国立国語研究所にやってきた。シネマ通りの自宅から国語研まで「チャリ」で通う。

1989年に大学入学。国際関係について学びたかった。英語やドイツ語は学校で習っていた。もっと別の言語を学びたい。ロシア語？ 中国語？ そんなとき、友達がこんなことを言った。「日本語は難しすぎるから日本人だけが話せるんだって！」。もうひとつの外国語は日本語に決めた。

やがて日本語で話せるようになると通訳の仕事が舞い込んでくる。しかし自分には通訳はできないと悟った。通訳していても、自分の意見が言いたくなって仕方がないからだ。

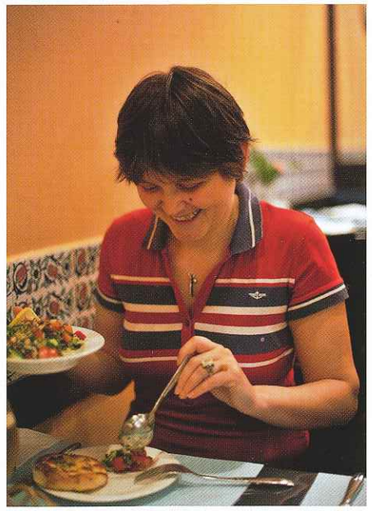
東京大学に留学していた頃、生きた日本語、生きた日本文化を知ろうとして質問すると、相手は外国人として答えを用意する。顔が日本人ではないから、このままではいつまで経っても日本語を極めることはできないと思った。

剣道部に入った。27歳だった。ここなら外国人としての特別扱いも年上だという遠慮もないと思ったからだ。27歳なのに稽古は1年生と同じ掃除から始まった。日本語でしか説明されない伝統や心の修行。言葉のためだけでなく、剣道の魅力に引かれ段取得に挑む。アンカラ大学で剣道を普及した。2009年5月に3段を取得。

立川女子高校にて

仕事が終わってから遠い道場へ通うのは容易ではない。仕事の合間に体を動かすには近いところがいいと、この日は立川女子高校剣道部を訪れた。部員と一緒に基本の稽古をすますと、顧問の和田教諭と試合。シャワーを浴びたような汗を流す。最近新しい防具を買ったのだと言う。「お金を出して防具を買えば、辛くてもやめないでしょ」といたずらっ子のように笑う。

一方で、ショップやファミレス、コンビニでの若い人の会話に耳を傾ける毎日。聞いた言葉はすぐ使う。「どうしてそんな言葉知ってるの？」と驚くと、答えは「だって、私は日本にいるんだよ～。生きてる日本語を使わなきゃ意味がな～い」。



Turkish Kitchen Izmir にて

現在の研究テーマは「待遇表現」。具体的にどんな研究なのか。6月22日に東京日本・トルコ婦人クラブ主催で行われた講演会で、講師としてこのように話してくれた。

「ナル表現と言いますが、自発的動作を現象化しているんですね。誰がどうしたということよりも、こういうことが起きているという表現の仕方。これは丁寧さと非常に関係が深い。例えば今日本の若者がよく使う言葉ですね。『こちらはコーヒーになります』です。間違いだって言われる表現ですよね。その間違いだって言われることが、う～ん、なんで間違いなの？ いい感じ～って思っちゃうのが、このトルコ人としての私（笑）。どうしていい感じって思うかというと、私たちトルコでは同じように、目の前に物が現れるのと同時にやはり『Kahven-iz (ol) ＝あなた様のコーヒー（になります）』なんですね。『コーヒーを持ってきました』『コーヒーです』って言えば、なにか指摘しているように感じる。それより現象が起きているかのように言った方が、若者には丁寧に感じられているのではないかと思っています。

この表現について最近の若者が間違っていると言われていますが、旅館等に行っても「こちらがお風呂になります」と言うんですね。しかもそれを使うのは若い人かというとそうではない。つまりこの「になります」という表現は定着しているものではないかと思っています。相手と一緒に空間を共有し、現象を指している。指示していない。教える立場でもなく、ただ記述しているので非常に丁寧に感じられるのではないでしょうか。」

他にも日本語の受け身表現は感情を表すことができるが、トルコ語の受け身は表せないとか、膠着語同士の似た面、異なる面など具体例を交えておもしろく話してくれた。母国語が膠着語であるということも、膠着語が何であるかという事も、母国語であるがゆえに気づけない私たち。日本語の特徴をわかりやすくテキメンさんに指摘されることで、さらに日本語の理解が深まりトルコ語への興味も湧いた。

来年2010年はトルコにおける日本年。友好の要として、テキメンさんは多いに活躍してくれるにちがいない。

国立国語研究所

東京日本・トルコ婦人クラブ　講演会にて

テーマは架け橋「過去から未来への橋渡し」

第51次隊を乗せる　新「しらせ」

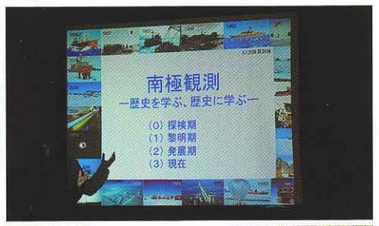
第51次南極地域観測隊 始動！

『南極観測隊』と言っても「それで?」と
聞き返されてしまいそうな立川で、第51次隊が活動を開始した。
極地研の建物の中に『隊員室』、外にはJAREと書かれたコンテナがいくつも並ぶ。
最近は道路端に丸いアンテナも。
不思議だらけの『南極観測隊』。第51次越冬隊長に話を聞いた。

案内人　**工藤 栄**（第51次隊越冬隊長、総副隊長を兼務）

プロフィール
国立極地研究所 研究教育系生物圏研究グループ 准教授
研究分野は水圏生態学、植物生態学。理学博士（東京大学）

第51次南極地域観測隊員
夏訓練集合写真
（写真提供：国立極地研究所）



草津で行われた夏の訓練から

2009年7月1日。立川市緑町にある国立極地研究所で正式に第51次南極地域観測隊（本吉洋一隊長以下越冬隊28名、夏隊34名）が活動を開始した。第51次隊は平成17年11月からの「南極地域観測第VII期計画」の最終年次（4年次）として位置づけられている。計画をいかに終わらせてくるか、それは非常に重要なミッションとなる。新しい砕氷船しらせを利用する初めての年にもあたるため、輸送体制や船上観測などにおいても注目され、また第VIII期計画から新たなカテゴリーとして加えられる「公開利用研究」の実施に向けて、その試行を実施。研究者だけでなく設営隊員にとっても忙しい夏になる。

工藤栄越冬隊長の専門は生物。第40次の越冬を皮切りに、43、44、45、48、49と、今回の51次で7回目の南極となる。初めて南極に行く隊員は不安な要素が多いので気楽ではないだろうと、過去の自分を振り返って話す。今年11月24日に夏隊と合わせて62人の第51次隊が空路日本を出発する。オーストラリアのフリーマントルから砕氷船しらせに乗船、南極圏に入り昭和基地へと移動。太陽の沈まない季節、南極はもっとも賑やかで忙しい時期になる。51次隊の夏隊、50次隊の越冬隊の総力をあげて越冬までにあらゆる仕事を終わらせるからだ。夏期計画の仕上げをし、越冬の交代をすると50次隊と51次夏隊はしらせに乗船、帰国の途につき3月19日には成田へ到着する予定。一方越冬隊28名の仕事はさらにそこから1年間続くことになる。

越冬中にも野外観測などで旅行にいかなければならない。医者や調理隊員が必ずしも同行するとは限らないので、予めある日の夕飯の残りとかをレトルトパックのように作っておくのだという。なかなか南極観測隊を身近に感じることはないが、そういう話を聞くと少し行ってみたい気はする。誰にでもチャンスはあるのだそうだ。ただし、続けて2回、3回、4回と行くとなると、やはりそこで何かを研究しようとか、知りたいという強い思いがないと繰り返し行くことはできないそうだ。一生のうち1回は行ってみたいと思う人は多い。しかしそれを生業にしていくとなると話は違ってくる。

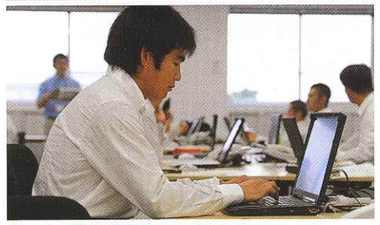
観測隊は毎回メンバーが異なる。もちろん同じ顔ぶれが揃う事も少なくないが、基本的には毎回新しく編成されるのが観測隊。毎回新しい人間関係を構築する。その割には事前準備期間が短いのでは？ 工藤越冬隊長は、むしろ行ってしまってからの方が人間関係は作りやすいという。なぜなら「もう逃げ場がないからね」。

「南極料理人」という映画がある。最初のシーンから「逃げ場がない」ことを痛感させられて苦しくなる。逃げ場が無く単調な毎日が辛くないかと聞くと、「逆に何かあったら大変だからね」と笑う。逃げ場のない人間関係を面白いと思うか思わないかが分かれ目。親密な人間関係の中で、すべてのことを自分たちの手で作り上げて行く時、協力は欠かせない。そこに喜びを持ったり楽しみを感じたりできないと暮らせないそうだ。南極観測が始まったばかりの時代は山を登る人などチャレンジャーが多かったし、大家族が当たり前だったから人間関係の問題回避の術を知っていた。が、現在は核家族化し、部活で長期合宿する事も少なくなった。加えて南極も居住環境が整ったり、飛行機で南極へポンと降り立つことのできる時代になったことで、人間関係の備えなく紛れ込んでしまう人も。今も昔も南極の自然は変わっていない。まだまだ甘くはない。それなのにどこか甘くなったような感じに受け取られている。もう南極では死なないのだという誤解があるようだが、そうではない。最近は女性の隊員が増えてきたが、女性は南極に行くことに対して相当な覚悟をして参加している。だから女性隊員の行動は、何回も行っている人間からすると安心して見ていられる。覚悟が見えるからだ。覚悟して、自分から積極的にどんなことにもチャレンジしていく前向きな姿勢だけが、生きながらえる術になる。

無人観測してデータを南極から転送すれば、南極に行かなくても数値をみることのできる時代になった。しかしそこには実感が伴わない。生き物の困っている現状をデータ的に見ることはできても、実感がないので表現できず伝えられない。地球の未来を考えるとき、研究者が南極の自然に密着して生活する観測、越冬研究はこれからも必要なことだ。ぜひしていかなければ、これから先も新しい事は何も見えてこない。人間が南極にたどりついてまだ約200年。きちんとした科学研究を始めてまだ50年。これからが大事なのだと工藤越冬隊長は言う。

最後に、南極でなければ味わえない醍醐味を教えてほしいと聞いてみた。
「それはやっぱり、30名弱の狭〜い人間関係でディープに暮らすこと」と真顔で言った。

藤井 理行極地研所長（左）と本吉 洋一隊長


第51次南極観測隊隊員にはこんな方も
プロスキーヤー 佐々木大輔さん

立川市緑町 国立極地研究所敷地内のコンテナ

木に花 草に風

石田郷子 第二回

■石田郷子　俳人。1958年東京生まれ。おもに武蔵野をフィールドに作句。句集に『秋の顔』『木の名前』。俳句雑誌「椋」代表。俳人協会・日本文藝家協会会員。

若葉町界隈

前回、羽衣町の矢川緑地での吟行のことを書いたが、もう一つ毎月楽しみにしている吟行会がある。「小雀(こがら)の会」。こんな可愛い名前にしたのは、初心者のための会だから―いや、だったから。二年経ってみんなすっかりベテランになってしまった。

吟行地は立川・若葉町界隈。わが家に荷物を置き、手帖とペンだけ持って出かける。吟行は一歩外に出た瞬間から始まる。

「あっ！　蝶々」

と、誰かが指さす。枝垂れた萩にシジミチョウがまつわっている。

「ほんとだ、秋の蝶ね」

などと、手帖に書き付けておく。真冬をのぞいて蝶々は一年中飛んでいるので、ちっとも珍しくないのだが、なぜかみんなで歩いていると蝶一匹(正式には一頭)でも関心の的となる。

「おおーっ！　かまきり！」

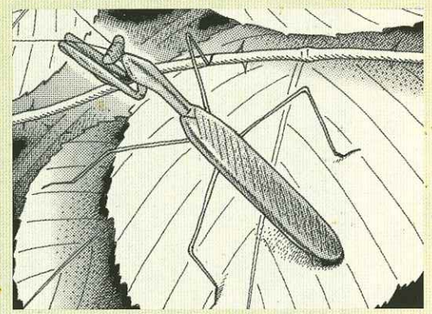
網戸に大きなカマキリがしがみついている。カマキリとなると関心度も高い。

「トウロウね」

もうベテランなのでさっと手帖に書き込む。そう、カマキリのことを俳人たちはよく「蟷螂(とうろう)」とか「いぼむしり」などと呼んでいるのだ。「蟷螂」はいわゆる漢名で、「いぼむしり」はこの虫でイボを撫でるととれるからだという。―ほんと?!

こうして一行は住宅街の中をうろうろしながら、空き地にススキの穂が出ていたりヤマゴボウの実が色づいているのを見つけてゆく。

何か見つけるたびにみんなで穴のあくほど見る。あまり熱心に見ているので、通りかかった人も立ち止まっていぶかしげに見てゆく。(これでもギンコウなんです。決して怪しい者ではありません！)



イラスト：小林木造

清掃工場の白亜の煙突をめざして植木畑の間を抜けてゆけば若葉緑地。ここにはケヤキやクヌギ、コナラなどの高い木があって、秋の蝉がしんしんと鳴いている。お年寄りに連れられた小さな子どもが切り株に蝉の抜け殻を並べている。見ると、地面にたくさんの丸い小さな穴があいていた。

「これ何だかわかる?」

と指さしてみる。たいていの人は知らない。

「これはね、蝉の穴」

というと、「へえー」と感心されるのだ。ふふふ。

地面にしゃがんでしみじみと穴を覗き込んでいる中高年九人に、ふとキンモクセイの香りが流れてくるのだった。

俳句といえば名所旧跡を詠むものと思われがちなようだが、決してそんなことはない。歳時記や図鑑がありさえすれば、小さな庭や近所の公園、道端でさえさまざまな季語と出会える。

すれ違ふもの秋風の中の蝶　せきれい

かたこと　本号が出る頃はまだ残暑が厳しいでしょうか？　梅雨が明けても雨がちだったり、九州や中国では大雨や土砂災害に遭った夏。いろいろなお見舞いの思いを込めて『えくてびあん』9月号をお届けします▼気まぐれなお天気に振り回されて過ごしても、季節は確実に巡っていきます。9月も下旬になれば秋のお彼岸。暑さ寒さも彼岸までと言いますが、路にこぼれた萩の花や、空の雲が季節を秋につなぎます▼地球の裏側、南半球はこれから春。年間企画として取り上げている国立極地研究所から出発する南極地域観測隊も始動。工藤 栄 第51次越冬隊長にお話をうかがいました▼「立川と語ろう」は、トルコから博報招聘研究員として国立国語研究所にいらしているアイシュヌール・テキメンさん。研究者であるだけでなく剣道三段。日本とトルコ、異なる文化をつなぐ架け橋というべき方▼表紙裏の連載企画「パンのある風景」もスタート。物語りや映画でたどる人々の生活、そして人生。小道具のパンがきらりと光ります▼学校は夏休みも終わり新学期。見慣れた顔も久しぶりに会うと新鮮です。『えくてびあん』も、ひと月ごとに新鮮でありたいと思います。

えくてびあん (c)　9月号　第28巻　通巻298号　平成21年9月1日発行

発　行　有限会社 えくてびあん
〒190-0023 東京都立川市柴崎町2-1-10 高島ビル4F
TEL. 042-528-0082　FAX. 042-528-0065
発行人　黒須 環
編集人　芳賀敏博

編集スタッフ　大久保清志／清水恵美子／中薫子
デザイン　池田隆男（WATER DESIGN ASSOCIATES）
AMMNET design factory
写　真　五来孝平／中村 伸
スタイリスト　小川町子
印　刷　株式会社 大廣社

無断転載を禁じます。

表紙の人

藤生義治さん（柴崎町）

1969年に渡仏。パリ「ジャン・ミエ」や、ウィーン、スイスでヨーロッパ菓子の伝統を吸収し帰国後、80年に立川「エミリー・フローゲ」のシェフパティシエに。93年に日野市高幡不動に「パティスリー・ドゥ・シェフ・フジウ」を開く。フランス菓子の伝統を踏まえながら斬新な感性のスイーツの数々は、高く評価されている。一昨年10月、立川駅ecute内に立川店をオープンした。その店内に立っていただくと、やはり風格が漂う。

JR立川駅ecute「パティスリー・ドゥ・シェフ・フジウ」立川店で　写真：細江英公

街の話題

■極地研探検――極地研が一般公開します！

2009年8月29日(土)、10時から16時（入場終了は15時半）まで、立川市緑町（モノレール高松駅から徒歩10分）にある国立極地研究所が一般公開します。第51次南極観測隊長の講演があったり、南極「昭和基地」とライブで話せちゃう。オーロラの映像やペンギン、アザラシのはくせいもすぐ目の前で見られます。サイエンスカフェに行くと、研究者の人たちがいて、隕石のこと、オゾンホールのこと、氷のこと、南極や北極の生き物のことなどな～んでも答えてくれます。

南極に住む魚　ライギョダマシ

探検ツアーに参加すると、マイナス20℃低温室を体験できたり、16000個の隕石のある資料室や、めずらしい生物の標本保存室にも行けちゃう、しかも研究者の先生のガイドつき！　こんな機会に「南極通」になっちゃおう。

詳しくは国立極地研究所　広報室
042-512-0655までお問い合わせください。

■みんな集まれ！「子育て教育フェア」

立川市市立幼稚園協会主催の第7回「子育て教育フェア」が9月12日(土)モノレール下サンサンロードを会場に開かれます。「えくてびあん」ブースでは今年も、楽しい企画やプレゼントを用意してお待ちしています。

5月に立川に移転してきた国立極地研究所。まさに今、南極観測隊が11月の出発を前にして立川で準備中。「えくてびあん&多摩てばこネット」ブース内ではペーパークラフト作家の山本恵子さんの指導で毎回先着20名のお子様に、ペンギンや白熊のオリジナル・ペーパークラフトづくりを体験していただけます。

東京都で初めてFSCを取得した「青梅の杜」からは、間伐材を利用した薪窯パン工房 木の葉がやってきます。おいしいものや楽しいもの。珍しいものにきれいなもの。まさに玉手箱のようなブースです。

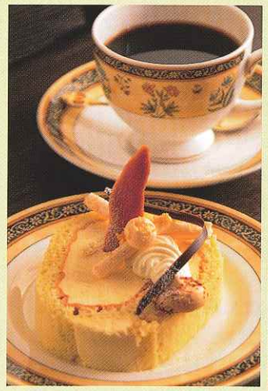
子育て、幼児教育のヒントや楽しいイベントがたくさんの「子育て教育フェア」。お子さまと一緒に「えくてびあん」ブースにもぜひ、お立ち寄りください。

▼全員プレゼントの雪上車ペーパークラフトとキャンドル

この人この店 (74)

一六珈琲店

田中 誠一さん



〈コーヒーショップ〉ではない〈珈琲店〉。ドアを開ければ、その空気でわかります。アンティークな時計がいっぱい。水だし珈琲の機械がまた素敵です。珈琲は雰囲気と一緒に味わうものだと改めて思わされます。居心地のいい空間で、好みの珈琲をいただきます。「珈琲のことならなんでも聞いて下さい」とおっしゃる田中さん。好みを伝えれば、飲みたかった味がテーブルに。田中さんご自身が大好きだというだけあって、きめの細かい選定で個々の好みに応えてくれます。もともとはパティシエだったというだけあって、さすが、ケーキはとってもおいしい！　おいしいだけじゃなくて、デコレーションもファッショナブル。期間限定は全部試してみたくなります。メニューを見たら、なんと大きなパフェもある。種類豊富なホットサンドは500円。ランチタイムは100円引き。ソフトな田中さん。控えめなのに存在感。やっぱり珈琲店の店主です。

●〒190-0022 立川市錦町 1-4-19　●TEL 042-527-1680
●営業時間 11:00～22:00 日曜・祝日 20:00まで　●定休日 月曜
▶多摩てばこネット〈お店のコーナー〉にも掲載中。

えくてびあんの輪

えくてびあんは
リストのお店にいつもあります。
今月は 錦町 のお店です。

錦町	焼きたてパンの店 ヴァイツェンブロート	527-2176
	日本クッキングスクール	522-3440
	ラーメン店　麺や光	525-5539
	ザ・クレストホテル立川	521-1111
	美容室 アリス	525-1100
	パンと洋菓子 うちのやブルマン	524-9280
	そば処　そば菜	522-7558
	画廊　無門庵ギャラリー	529-2323
	美容室 FALCO	528-2389
	諸官公庁御用達・日用雑貨 池田屋	522-3731
	N HAIR WORLD	523-5336
	しゃぶしゃぶ・鍋料理 しゃぶ・りん	527-2228
	TTM株式会社	524-5787
	スペイン料理 TAPAS	529-0733
	Bakery Cafe Crown	526-2226
	三田花店本店	524-4187
	いわさき痛みの整骨院	529-5123
	(有) 朝日屋酒店	525-6333
	にしやま薬局	525-9212
	アミューたちかわ	526-1311
	多摩信用金庫　錦町支店	528-0511
	そば処　高尾亭	522-2710
	Natural Food Restaurant シェいなば	529-5921
	エストランテ　ロズまり	529-3037
	リストランテ　ラ・ポポラリータ	527-3880
	高齢者総合施設 至誠ホーム	527-0031
	至誠ホーム　スオミ	527-0033

jorakugajo
真如苑提供番組＜常楽我浄＞
スカイパーフェクTV 216ch
マイ・テレビ アナログ 11ch
デジタル 111ch
放送時間については番組表をご確認ください。
www.shinnyo-en.or.jp

南極料理人
8/22(土)よりロードショー！
CINEMA CITY
JR立川駅北口より徒歩5分　042-525-1251(24時間自動応答)

オーストリアの森で

『世界文学「食」紀行』 篠田一士

映画を見ても本を読んでも、忘れられない１シーンに出会うことがある。文学研究者で翻訳者でもある篠田一士は美食家として有名。アーダルベルト・シュティフターの「石さまざま」なんて言われてもまったく読む気がしないのに、篠田一士がその１文を紹介すると、突然目の前にオーストリアの森が見え草の上のパンや塩豚が生き生きと香ってくる。草の上に手持ちの皿を広げてナイフとフォークを添える。きめの細かい白いパンを薄く切り、ハムと冷肉、それにチーズだ。篠田は言う。「さすがシュティフターだけのことはあって、（中略）素食を実にうまく食わせてくれるのはみごとである。」

こんな風に食べ物を紹介できるようになりたいと、取材するたびいつも思う。

木の葉
青梅市黒澤 3-1574-1

TEL 0428-84-2280
営業時間　11 時～18 時
定休日　毎週水曜日、第２・４木曜

東京都で初めて FSC を取得した「青梅の杜」の間伐材を利用した薪釜パン工房
http://www.konohapan.jp